

## 志村 恵「本のなかのふたごたち」②

### エーリヒ・ケストナー『ふたりのロッテ』

「そうよ、『ふたりのロッテ』よ。あれを読むときは、今でも胸がドキドキするわ」。碩学のドイツ文学者ヒルトルート・ヘンチェル博士は、ミュンヘンの学生街にある昔ながらの居酒屋でまるで女学生のように目をきらきらと輝かせて、せき込むように言いました。それは、僕が最近何を研究しているか聞かれ、「ふたごの文学史」を計画していると話したときのことでした。成人した4人の子どもを育て上げた大人の女性の胸を今でもときめかせる作品！

子どもも大人も、みんなが好きなこの優しく、そしてわくわく、はらはらするそんな物語を書いたエーリヒ・ケストナーは、1899年、ドイツ・ドレスデンに革職人の子どもとして生まれました。ライプチヒ大学などで、文学、歴史学、哲学を学んでいる間にすでに学生詩人として頭角を現し、博士号を取得した後は、劇評を書いたりしてフリーの文筆家としての歩みを始めました。「黄金の20年代」と呼ばれる二つの世界大戦を挟んだ時期のことです。1928年、『エーミールと探偵たち』を発表すると、彼はたちまちドイツを代表する児童文学者の地位を得ます。現在を生きる僕たちの目から見ても、本当に面白く、少年の心をうまく描ききっているからでした。しかし、日本では余り知られていませんが、この超有名作家ケストナーもナチによって（それは彼が真のモラリストだったから）弾圧され、その作品は火に焼かれたのです。

実は、ナチスが政権を握ったのと同じ1933年、ケストナーは『飛ぶ教室』を書いています。こんなにすがすがしく、正義感と清潔感に溢れた少年たちの姿をこの時代に書いているとは驚きです。そして、その精神を戦後の1949年に別な形で表現したのが、『ふたりのロッテ』というわけなのです。

さて、『ふたりのロッテ』はウィーンにお父さんと住んでいるルイーゼ・パルフィーとミュンヘンにお母さんと住んでいるロッテ・ケルナーという9歳のふたごの姉妹が、偶然に夏のキャンプで再会するところから物語が始まります。両親は事情があって離婚し、ふたごのそれぞれを引き取って、約500キロも離れて暮らしていたのです。真面目すぎる「小さな主婦さん」ロッテと活発な「おいたさん」パルフィーは、最初打ち解けるのに少し時間がかかりましたが、自分たちがふたごであり、両親が別れて暮らしていることが分かると、キャンプの間片時も離れず、ある計略の作戦を練るのでした。それは、入れ替わってそれぞれの家に帰るといふ計画です。というのも二人は家政婦が「十字を切る」くらいそっくりだったからです（入れ替わりは、一卵性双生児なら誰しもがやったことのある悪戯ではないでしょうか。僕も高校のとき、相方とクラスを入れ替わって、授業を受けたものです）。もっとも、ルイーゼになっていた宮廷顧問官の飼犬ペペールだけは匂いでかぎとっていたようですが（一卵性双生児の場合は、匂いも似ているので、実際は犬も間違うときがあります。僕の相方が飼っていたモン・モランシーという名の老犬は、年のせいも、それとも僕たちの匂いがよほど似ていたのか、僕と相方を完全に間違いました）。

ところで二人のお父さんの宮廷音楽監督パルフィー氏は、芸術家ですから、女性との付き合いもあります。二人の望みとは違って、イレーネという女性と結婚しようとしています。ルイーゼになりすましたロッテは、ここでついに緊張が頂点に達し、病気になってしまいます。「じぶんでも、じぶんがふたりのうちのどちらだかわからなくなったわ！」と言うほどの精神的危機に陥ってしまったのです。これを救ったのが、ミュンヘンから駆けつけた母親とロッテになりすましていたルイーゼでした。母親とルイーゼと再会して、ロッテの熱は下がります。そうして、二人の勇気と愛情に負けて、両親は話し合い、やが

でもう一度結婚をやり直すことになるのです。

ケストナーは、ふたごの機知と愛情溢れる計略によっていったんは離婚した夫婦を、再び結びつけていますが、単純に離婚が悪いとは考えてはいません。子どもにとって離婚した方がよいケースもあることをきっちり自覚した上で筆を進めています。楽しい家庭が維持できればよいのですが、そうでないときも現実には多いのです。特に、ふたごの出産・育児は大変ですから、その過程で様々な問題が夫婦間に生じることは事実でしょう。それをきっちりとわきまえた上で、なおも、ふたごにとって共に助け合って、仲良く、そして自立的に生きていくことが幸せなのだと語っているのです。行き違いや誤解から来る不和、日常の疲労から来る不信感など、ふたごを育てる中で考えなくてはならない問題は色々あります。ケストナーは、実は『ふたりのロッテ』の中で、それを救う一つの処方箋を出しています。それはユーモアです。これこそがケストナーの文学を理解する大きな鍵なのですが、至る所にちりばめられたユーモアのなんと人間味溢れ、英知に富み、そして僕たちに余裕を運んでくれることでしょうか。ペペールの飼い主の宮廷顧問官の医師シュトロープ博士は、この処方箋を次のように評しています。「それでもう大丈夫。これは高価な助言だが、無料だ！」と。

物語の最後に、ルイーゼとロッテは、他にも兄相方姉妹が欲しいと主張します。それも「ふたごばかりよ！」と。二人は、本当にふたごであることに満足しているのです（僕もふたごであることを誇りにしていますし、ふたごの子どもが欲しかったですし、また、今度生まれるときもふたごがいいです）。

最後にこの物語を読んだ僕の大学のふたごサークルの学生の感想を書いておきます。それは、「どうして『ふたりのロッテ』であって、『ふたりのルイーゼ』ではないのだろうか？ルイーゼが可哀想」というものでした。いくらすばらしい物語であっても、いくら公平で、気持ちの良い物語であっても、やはりふたごの目からすると、片一方の名前だけを題名にするのは、抵抗があるようです。僕は全く違和感がなかったのですが、非常に深く考えさせられました。一人ずつでありながら、二人一緒のふたごでもある、自立と共生の緊張にあるふたごにとって、重要な問題です。



エーリヒ・ケストナー『ふたりのロッテ』書影

エーリヒ・ケストナー『ふたりのロッセ』ケストナー少年文学全集 6、および岩波少年文庫、ともに岩波書店。

『ツインズ』26号（ビネバル出版）から転載